

Title	白峰寺縁起跋
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.2 (1924. 8) ,p.164(325)- 164(325)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19240800-0164

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

白峰寺緣起跋

本年晚秋崇徳上皇の南狩遺蹟を一巡したる節、白峰に登り帝陵を拜し、白峰寺に宿す。寺寶として後小松院の勅額（國寶）・白峰寺緣起（群書類從卷四四二）・同寺緣起跋・南海治亂記の原本等なり。就中白峰寺緣起跋は蒲生秀實（君平）の自筆にて、先年反古の中より偶然に發見したるものなり。こは「蒲生君平全集」にも逸したれば、左に記して讀者の參考に供せむ。

白峰 緣 起 跋

以天子之尊不能終九重之内卒。使孤墳寂々乎。荒陬僻海豈可勝歎乎。雖然生孰無死弔反可慶。其已憂辱於一時所以見畏敬於千載也。實山東草莽之臣。常哀累聖山陵多就荒穢而不祀。爲之再西遊以尋問其地。則京畿之間所注莫不皆痛心。惟彙如吉野今來此。而獨觀陵寢嚴寺家守之不怠也。如所謂問之水濱者哉。宿於白峰寺。與其住僧明公一夜談話。聊寫憂也。公爲實言曰。崇徳之南狩也。傳松山。遂御野大夫高遠之所三年矣。高遠之世。即林田氏也。其家至今不絕。事尙存口碑。後遷居甲知郷鼓岡六年而崩焉。是清少納言良賢所記爲然。而甲知郷舊國府所在。今既失其名。昔菅公守於是邦也。早。公爲民祈爾於城山。以必死出府。故後人感其德政。名與民訣處曰死出。而鼓岡在其邊。死出志度音相近。小說以此謬作志度鼓岡。然志度與府相距五六里。決非鼓岡之地。但世之傳誤。非一日故。今辨之也。言畢。因需識其由。辭不獲。乃題。

寛政庚申夏 下野蒲生秀實

印

寛政庚申は即ち寛政十二年、秀實三十三歳の時なり。

(大正一二、一二、一、武田勝藏記)